

農家の田畑・庭を舞台に、いのちとのふれあい・育ちあい 「3年たって“この子たちの絵は色の使い方がすごくきれい”」

稲または大豆の栽培を縦糸に、作物の育ちをみつめ、季節感たっぷりの昼食づくりや野のおやつを楽しみ、ロバや山羊・犬などの動物の世話をする。農村の宝をめいっぱい使った、多彩ないのちとのふれあい体験を生き物の気持ちで書いたり、大事な人への手紙にしたり、振り返りを重ねていく「季の野の台所」の教育ファーム。ここで体験した子どもたちの絵の色の美しさ、つらい妊娠期を頑張って通いついに出産したお母さんと家族・・・など、指導農家自身も感激し学ぶことの多い交流の場だ。

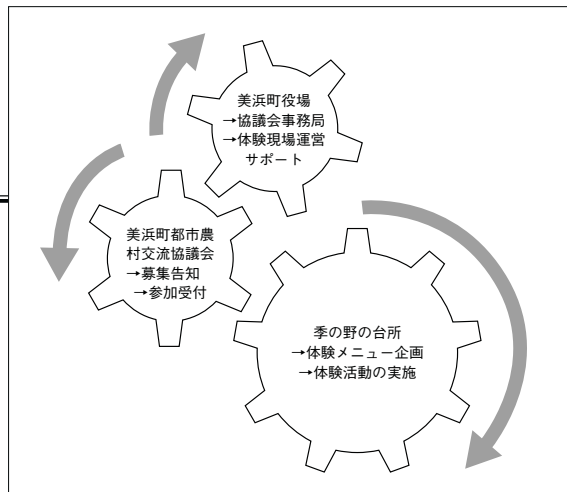
季の野の台所

取組主体

- 名称：季の野の台所
- 担当窓口
担当課(者)：森川 美保
住所：愛知県知多郡美浜町布土字豆池23
電話・FAX：0569-82-1931
E-mail：kinononodaidokoro@cotton.ocn.ne.jp
- 団体等の属性：農林漁業者
- 構成員数：4人、1頭、7匹、
- コーディネーター等：本人
- 活動内容を紹介するHPアドレス
季の野の台所HP
<http://kokokonohatake.p1.bindsite.jp/>
<http://kinonohanonn.blog.ocn.ne.jp/syunnkasyuutou/>
東海農政局HP
http://www.maff.go.jp/tokai/shohi/seikatsu/shokuiku/farm/kinono_inoti_kome.html
http://www.maff.go.jp/tokai/shohi/seikatsu/shokuiku/farm/kinono_inoti_daizu.html
- 連携団体及び協力団体
属性：市町村、その他
内訳：愛知県美浜町、美浜町都市農村交流協議会
※年間を通じて1500人程度を受け入れ、取組内容も連携状況も多岐にわたるため、平成22年度的美浜町都市農村交流協議会との連携により実施中の教育ファームの活動についてのみ記載。



田畑・里山のいろいろな体験が待っている



取組地域及び地域の特徴

取組地域：愛知県美浜町

地域の特徴

愛知県知多半島の南部に位置し、東西が海に面し、その両海岸に向かって広がる平地と、ほぼ中央を南北に丘陵が連なる温暖な町である。三河湾国定公園の自然、温暖な気候、名古屋市より1時間の通勤圏、近年の中部国際空港の開港など、観光産業としての条件が良いほか、日本福祉大学、杉本美術館、愛知県少年自然の家などの教育施設もある。町の人口は約2万4000人、世帯数は約8000世帯で、世帯数の少人数化が進行している。

かつて水不足に悩まされた中央の丘陵地帯も、愛知用水の通水により、肥沃な土壌と1年を通して温暖な気候条件を生かして、各種の作物が栽培されている。また、畜産関係についても養鶏、養豚、肥育牛、酪農と多種の畜産農家があり、漁業、農業の第一次産業が盛んな町で、消費者と生産者との物理的な距離は比較的近い関係にある。

このような環境のなかで、町は「自然との共生」をメインテーマに町づくりを進めている。

取組内容

(1)目的(目標)

農業体験という媒体を通じて、食べることや生きることの意味を、参加者とともに感じ、体験する活動を行なっている。一方的なメニューの提供ではなく、農家側も参加者からの気持ちを受け取って、互いの糧とするような活動を目指している。

知多半島の南部に位置し、青い海に囲まれた緑の丘陵が美しい美浜町で、里山のいろいろないのちを感じながら、米づくりや大豆づくりの体験を行なう。

- ・美浜の里山でヤギやロバなどの動物たちや、その他いろいろないのちを感じる。
- ・農作業や大豆の収穫だけではなく“何か”を見つけて、生きる力を蓄えるための季節を過ごす。
- ・子どもたちに、自然に包まれて遊んだ記憶を残してあげる。
- ・子どもたちに、誰かの役に立つことの喜びを感じる生き方をしてもらいたい。
- ・食や農に関心のある方、ゆったりと自然のなかで過ごしたいご家族などが満足できる体験内容を提供する。



体験作物はイネと大豆



作物を取り巻くたくさんのいのちとの出会いを大切に

(2)取組開始時期・経緯

森川美保さんは自宅等で味噌づくり教室などを開いており、結婚を機にご主人の所有していた農地をもとに夫婦で17年前に新規就農した。経営はイネ・大豆を中心に1ヘクタールを耕作しているほか、グリーンツーリズムなどの農業体験活動の受入れなどを行なっている。

これまで、田んぼの学校等で継続した農業体験受入れ・指導を行なってきたが、平成20・21年度の教育ファーム推進事業の協力団体（モデル実証地区）等に参加したことを契機に教育ファームの活動に取り組んでいる。

平成22年から「美浜町都市農村交流協議会」（事務局：美浜町）の協力を得ながら独自の企画も併行して教育ファームの活動を行なっている。

経緯の詳細については、次のURLを参照。

東海農政局HP

<http://www.maff.go.jp/tokai/shohi/seikatsu/shokuiku/pdf/dayori2002.pdf>

(3)対象作物

米、大豆

作物名・種類：

選定理由

イネと大豆の生産農家であること、および、他の作物や調理体験、自然体験と組み合わせて、農・食・いのちのつながりをより深く体験できる。

(4) 具体的な取組内容

●農作業そのものよりも参加者との心の交流やわかりやすい解説を重視

農作業の体験を通じて、自然やいのちのつながりについて、一方的なコンテンツや情報提供ではなく、家族や参加者同士で思いを交換・交流することに重点を置いている。そのため、体験の初回には、出身場所に並んで一人ひとり自己紹介をするなど、アイスブレイクの時間を設けたりしている。

また、森川さんは自らも小学5年生、2年生の子どもを持つ親の目線で、子どもにもわかりやすい説明を心がけるとともに、森川家の子どもたちも含めた家族全員が体験に参加することにより、実家や親戚に帰省した際に家族の一員として農作業を手伝っているような雰囲気での体験が進められている。

●農家の動物の活用

ロバやヤギ、犬、鶏などの温かみのある動物を庭で飼っており、活動のさまざまな場面で動物体験をメニューに取り込むことにより、いのちについてより身近に感じてもらうようにしている。農家における動物たちは、肉や糞などの利用、体験参加者の接待役など、それぞれの役割をしている。それを感じることで、参加者の家庭においても、子どもや親にも大切な役割があることについて理解を深めていきたい。

鶏については、さばき体験などを行ない、通常認識することのない「いのちを食べて生きている」ということについて、参加者に深く考えさせる内容となっている。



鶏のいのちをいただく(4頁参照)



農家の動物—ロバ・ヤギ・犬・鶏を体験メニューに

●振り返りのツールの作成

体験時だけでなく、体験後、数年たってもその内容を振り返ることができるように、振り返りのツールの作成を行なっている。

保育園の体験では撮りためた写真を、園児1名ずつ違った内容でレイアウトし、大きくなった将来の園児に向けた農家からの言葉などを添えたアルバムを有志の母親とともに作成した。

また、一般公募の家族連れの体験の際には、体験時に撮影した写真に、参加者一人ひとりが写っている動物や作物に成り代わって台詞を入れ、1冊の本にした。

今年度の取組みについては、体験1回ごとに「あなたの大切な人に、今日の体験について手紙を書いて下さい」と頼み、参加者より手紙を集め、体験後に家族ごとにまとめて文集として配布する予定である。

●参加者の募集方法について

上記の町を活用した他、独自のHP・メールマガジン、メーリングリスト、東海農政局のHP・広報誌・メールマガジンを活用している。

また、口コミやリピーター、地域におけるNPOとのつながりで参加されているところも多くある。

(5)年間スケジュール

※22年度の教育ファームだけでも、学童保育の家族や大学生を対象としたものなどもあるが、公募型の以下の2コースを記載。

【お米コース】

いのちの季節

平成22年5月15日(土曜日) 小さないのちの誕生	田植え、よもぎの草餅づくり
平成22年8月21日(土曜日) 手塩にかけたその結果	農家のおやつづくり：米粉を使って 里山の恵み：梅酢でさっぱりクッキング
平成22年10月10日(日曜日) 親離れのとき	脱穀、火の恵み
平成22年11月6日(土曜日) いのちをつなぐ	お米の調理、草木染め

【大豆コース】

いのちの季節

平成22年6月5日(土曜日) いのちの責任	大豆の種蒔き・定植、梅の実でおやつづくり
平成22年7月24日(土曜日) 生きる道筋	農作業、おやつづくり
平成22年11月27日(土曜日) 次世代へ	大豆の収穫、火の恵み
平成23年1月15日(土曜日) いのちをつなぐ	世界にひとつの手前味噌づくり

(6)参加者数・属性の実績及び推移

親子連れ等35名(その他年間受け入れ人数1500名)

(7)経費

平成20年(保育園における教育ファーム) 55万円(定額)

平成21年(公募された親子等による教育ファーム) 100万円(定額)

取組推進に係る課題及び対処方法(ポイント・工夫)等

●関係者(団体)との連携の経緯

美浜町(美浜町都市農村交流協議会)の担当者とは、日常の農業経営やグリーンツーリズムの取組みなどを通じて関わりがある。

平成20年、21年は国の公募型事業を活用し、平成22年度には交付金の活用も検討したが、県における交付金受け入れ態勢等が間に合わなかったこともあり、資金面でのバックアップは不可能な状況になった。しかし、町側は、町のHPや美浜町都市農村交流協議会等の組織を使って、募集告知やとりまとめ、現場にお

ける体験者の案内・誘導など、資金面以外でのバックアップが行なわれる態勢となっている。

●コーディネーターの存在の有無

通常は自らが行なうが、NPO等との連携の場合は、その関係者が行なうときもある。

●ほ場での運営の課題と対処方法

安全管理については、保険などの対応の他、体験前の説明に当たって、作業の持つ意味も含めて農具の使い方と安全使用の注意について時間をとるように、日課を決めている。

また、臨時にスタッフを頼み、昼食やおやつの下準備について協力してもらい、森川家のメンバーは主に体験場所における説明や指導に専念できるようにしている。

これまでの成果

参加者のコメントにもあるように、参加前に思っていたよりも、もっと深い気持ちで掘り下げ、感じる力をつけて体験後の日常生活を送ることで、その人が関わる世の中がわずかでも平和になっていくであろうことが予想できる。どうしてそれがわかるかと問われれば、回を増すごとに、取組み主体である指導農家自身が、参加者から人として教えてもらうことの質が確実に良くなっていく実感があるからだ。お手伝いの人についてくる子どもも、一緒に混ざって体験をするため、心が成長したと言われる。そんな相乗効果が現れている。

同じ地域に住む5歳児が子ヤギと一緒に大豆栽培を体験した3年後、小学校の先生が子どもたちの絵を見て「この学年は色の使い方がすごくきれい!」と誉めてくれた。描く絵で心の状態がわかるといわれるが、教育ファームでの経験が美しい色使いのできる一因になっていると思う。参加者のコメントそのものが一番の成果になっている。



体験が家族が共に過ごす時間を生み出す



体験・触れ合いをとおして柔らかな心を

今後の構想、課題

石窯をつくり、収穫した野菜や小麦を使ってピザやパンなどを焼いて食べる体験を取り入れたい。その体験を通じて、深くて柔らかな心になるような取組みを練りこんでいくつもりである。また、想いを共有し合える方たちと連携しての体験活動も準備をしている。心のなかに思いを溜めておくと、それはかたまりとなって接する人に感電し、相手の気持ちを知らず知らずのうちに害することになるので、かたまりのないさりとした人が増えれば嬉しい。

課題としては、表面的な教育ファームや農業体験をしている人、あるいは情報のみでしか理解していない行政担当者などにぜひ、自分の深さの限界で相手を見るのではなく（誰しもそういう面はあるのだろうが）、もっと深いところまであるということを理解してもらうこと。体験を通じて喜び、変わっていく純粋な参加者にたくさん接していると、関係者のみなさんがそうあってほしい、しかしその心の耕土をほぐすことの難しさを感じている。

季の野の台所

みんなのコメント集

取組の
実践者

21年度の取組みのなかで一番うれしかったのが、参加者のなかに6月の田植えのときに妊娠がわかって、つわりがひどいというお母さんがいて、参加をためらわれていたんですが、やれるところまででいいから一緒にやりましょうということですとずっとやってきました。不育症といって、おなかの中で育っていても途中で赤ちゃんが亡くなっちゃうという病気を抱えながらの2人目の出産でした。

1人目のお子さんもそれで、妊娠6ヶ月で、おなかの中で亡くなっていたり、今いる2歳の子もそういう大変な思いをしながら出産し、田植えも、稲刈りも、脱穀も全部来てくださっていて、一番最後に言ってくださった言葉がとてうれしかったのは、「最初から田植えとかして、いろいろな生きものつながり、動物のつながり、いのちのつながりを教えてもらいながら、ずっとやってこられたので、自分と子どもが強くつながっていたような気がする」というもので、体験のなかで鶏を絞めた日の10日後に無事に出産されました。

そして体験最後の日、生後40日目くらいの赤ちゃんを連れてきてくれたんですね。

赤ちゃんを見たときに、もうお米も、人間も、ヤギも、ロバも、ほんとうにいのちの重さというのは一緒だなというのを、この参加者の方に教えてもらいました。

1年間そんな感じでこられて、私にとってはこの赤ちゃんがもう一番のこの私にとっての収穫……物じゃないんですけど、育ててきたいのちのなかで一番大切なのちだなという、そんな感じで最後の取組みを終えることができ、とてもいい1年を過ごすことができました。

また、今年田植えが始まります。また種をまいて、いのちを育てて、教育ファームをつづけていきたいなと思います。

参加者

- ・今回の里山での体験は、わが家にとって素晴らしい出会いの連続でした。おなかに宿った小さいのちとのつながりもまた、より強く実感することとなりました。2歳の長男は数日前に、「ニンジン育てたい!」と言っていました。ニンジンの苗はありませんでしたが、キュウリにゴーヤ、エダマメと野菜の苗をいくつか買い込み、週末は土いじりをしました。シャベルを持ち耕すうしろ姿、何度も何度も水を運び与える姿、何ともたくましいものでした。おおきく育て、心も身体も。ステキなつながりをありがとうございました。
- ・子どもが学校で、季の野の台所の話をしたところ、担任の先生が事例にあげて、春休みなどのまとまったお休みには、このような体験ができるよう促す話をされたようです。通学している小学校は市街地の学校ですが、動物園や公園が近いので、自然体験をしている気になっている地域でもあります。生活に根付いた農家での体験がもっと頻繁に幅広い層の方を対象にできるといいなあと考えております。
- ・ここではね、誰もが自分が素のままに居場所があるんだよ。娘たちはどこにいるんだろう、何してるんだろう、楽しんでるかなあと気遣う必要がないって本当に気楽です。周りの人たち全員が気を配ってくれてね。今までのグリーンツーリズムは決められたプログラムをこなすんだっただけけれど、ここでは最後に全員で会食というときに向けてそれぞれ自分の役割があって考えて……という感じかな。

※巻頭の取材記事(4頁)もあわせてご覧ください。